

# 京鹿子



昭和五年九月一日発行  
通巻二八九号（毎月一回一日発行）

9月号

鈴鹿 呂仁

拾掬集 その九十六



忘却の渴きの街やハンモック  
雲海の怒濤の攻めや松山城  
一網を抛げ雲海を手の内に  
喝采の鉾廻し大路を廻す  
張り合うて蚯蚓は自死へ熱き砂  
魔界への甘きささやき火蛾狂ふ

毛虫焼く男の二言捨て切れず  
井の財布を叩く十日菊  
三水すいの日記を閉ぢる夜の秋

吟行・梅小路公園界隈

ジオラマは夢色十いろ夏休  
浮雲と掛け合ふやうに水遊び  
舗装路のあげは一頭影持たず  
片蔭の上枝取り合ふ野鳩五羽  
炎帝やざわつく園に遠汽笛

近詠

名誉顧問

和田 照海



## 潮騒回廊

とびしまの潮騒回廊夜光虫  
住めば都追伸ほどの青しぐれ  
空蟬の選びぬきたる高さかな  
老海女の磯笛切に波青し  
サハリンの風にあらがふ薄雪草

近詠

名誉顧問

塩貝 朱千



## 花の宴

火の鳥の羽拡ぐかにアマリリス  
胸に灯さむ情熱の紅い薔薇  
ダリア咲きワインレッドに黄昏れる  
昨夜落ちし沙羅は涙を溜めしまま  
花菖蒲観音さまのにほやかに

# 神麓集

近詠

福主宰

村田あを衣



## 籠の鳥

あいまいな自由白靴洗ひをり  
梅雨月夜鳴き合うてゐる籠の鳥  
梅雨晴間孤独のひとつ解き放つ  
ペン皿に願ひの筆を百年祭  
万感を繰りしアルバム日日草

花 芒 沼田巴字

紫陽花 直江裕子

遠き日をたぐり寄せれば花芒  
撫子や戦争ありし頃のこと  
無漸なや雨に濡れゆく花芒  
眠りより覚めし軽さよ夕月夜  
鰯雲人を恋しく思ふとき

紫陽花のいま五番目の彩を生く  
やむを得ぬ仕事を抱へ萼紫陽花  
七変化いつしか涙もろくなり  
地震激しふところ深き濃紫陽花  
濃紫陽花帯を締めたはいつのこと

夏は来ぬ 植村蘇星

実 梅 高木晶子

淑やかに楚々と十葉咲き広ぐ  
日の本を紡ぐ言の葉青嵐  
鳥の声聞き分け目覚む夏は来ぬ  
蚕しぐれの終りややこの目覚めたり  
夕ざれや日照雨きららと竹落葉

松の芯さっぱり切られ代替  
実梅落つ恵みの音を数へざる  
ハイヒール履く時来たり螢袋  
梅雨に入る小さき花の一番乗  
実梅の香ふはりふはりと傷治す

## 神麓集

神を招ぶ 伊藤 希眸

青田かな畦に渦巻く蛇の群れ  
六月を廻り畑の虫殺め  
モナリザのやうな娘の前野火放つ  
無心に笑む幼女をさそふ氷菓かな  
老鶯の山裂く声は神を招ぶ

砂時計 奥田 筆子

ききわけなきキャベツ畠の天使かな  
踏切の向かう裏ごゑの白あぢさゐ  
夏鴉その漆黒の感受性  
梅雨茸医院の跡の空手ジム  
砂時計の速さの命暮の春

小鳥くる 井上菜摘子

蕎麦の花摘むやどこかで会った風  
新涼やカートリッジに蒼い海  
おもひでに悼みてをれば小鳥くる  
つれづれに子規の鶏頭数へけり  
かまつかや忘れるためにふりかへる

田水張る 山中志津子

女子寮を封づ蔓ばら悲喜いくつ  
まほろばの塔も古墳も薫風裡  
田水張り山城一揆の跡を消す  
揚雲雀こころの友を呼ぶやうに  
こひのぼり四国太郎を飲み干さむと

## 神麓集

虹二重 井尻 妙子

相槌がうまく打てない秋の薔薇  
誉められて買ふスニーカーの真白  
八月や振り向く癖が直らない  
煮さうめん母のクセ字のレシピ本  
これからのこと明日のこと虹二重

水中花 鷺山 珀眉

青葉若葉ゆつくり見えてくる明日  
新宿の空は四角や水中花  
さくららば並ぶシェフのアラカルト  
初恋は螢袋の宝もの  
黒あげは魔女の化身か吾の影か

郭公 亀井 福恵

郭公や森の深さを訝とす  
夏落葉頁繰るごと次世代へ  
さざめきや八十八夜の暖簾内  
かにかくに洒脱に遠し洗ひ髪  
町騒をかなたに茅花流しかな

水鏡 西村 白仔杼

堰越ゆる水音静まる芒種かな  
ゆすらうめ素直になれぬ十三才  
閑かさをやぶる高原ほととぎす  
梅雨晴間村じゆう光る水鏡  
月着地へ螺旋階段ゆすらうめ

## 神麓集

倭の国 菊池和子

四葩冷え夫婦茶碗の罅の黙  
倭の国や道ある限り早苗風  
ふとと言ふ語の不確かさ草茂る  
をどらさる舌先三寸きぬかつぎ  
大夕焼山河の景を省略す

絹のむらさき 安田優歌

白雨去り雫も白き野のほとけ  
一八は絹のむらさき故郷よぶ  
一ページ捲る夕立去りゆけり  
七変化ひかりの苑へ水の旅  
あぢさぬや水と語らふ雲一つ

用の美 本郷公子

夕薄暑時を追ひつつ旅支度  
髪の高手に感じつつ髪洗ふ  
用の美の骨董の店濃あぢさぬ  
青竹の羊羹沈む太宰の忌  
葛桜灯ともしごろの人恋し

谷若葉 石原孝人

浮雲を代田に置きて小屋かな  
去る者は追はずと決めて花は葉に  
谷若葉釣り糸空へ振り直す  
世に出むと競ひて脱ぐや竹の皮  
船頭がそつと手を貸す白日傘

## 神麓集

蛇の衣 佐藤千恵

老老介護軒に蜂の巣太らせて  
パソコンを閉づや青夜に沈みゆく  
蛇の衣や少し離れて媛の墓  
もう一度渡る八つ橋かきつばた  
短夜やこむら返りをなだめつつ

新涼 山田和

新涼や織り上りたる能装束  
梅雨明けや胡鬚の咆哮天を突く  
戯けつつ赤腹沈む古代池  
碑の翳の羅城門かな揚羽蝶  
風連れて花大根を父母の墓





## 丸山海道 十句（昭和三十一年）

被爆ドームの夜は寒星を吊る鉄杵  
若水汲む妻 暁明の唇むすび  
維新の眼わが目凍雲下に睦ぶ  
首都へ一步の雪の足あと軌条に潰え  
花を待つ石組みだれなき古城  
新樹にほひ湯上り妻の一糸の紅  
遺影の髭亡き誰かに似霖雨霽る  
山の井に蛇落ち墓も落つ青天  
航はじまる秋夜の湾が怪の口あけ  
夜泣そば 笛吹く湾に抵抗なし

（真由美抄出）

## 英華採集

薔薇の字のほどけるやうに薔薇散りし 福山 古本もね  
薔薇の漢字をすらすらと躊躇いもなく書ける人は少ないだろう。何故、このように難しい字が充てられたのであろうか？古代ギリシアのクレオパトラそしてローマの皇帝ネロが薔薇の愛好者であったらしいが、中世では美しさや芳香が人々を惑わせるとしてタブー視された歴史がある。薔薇の漢字の難しさと妖しげな特性を考えれば、薔薇自身が自戒の意味で散り際の最後を飾ったのではないか。作者の薔薇への気持ちに納得させられる。

あぢさゝみや私は万華鏡の中 大津 村野 名於子  
最近、朝ドラの「らんまん」の影響からか、面白い逸話を耳にした。シーボルトが日本の「あじさい」が「オタクサ」と呼ばれている、と自著で説明したらしいが、これがシーボルトの愛した女性「お滝さん」の名前からと推測された。お滝さんは花柳界の人であることから、掲句の万華鏡と奇しくも花柳界の世界とが結びついたのも不思議な感覚がある。作者も自分自身を華やかな世界に置いて紫陽花と重ね合わせたのであろう。

字余り字足らずも一瞬に若葉 姫路 松山 千里  
俳句の世界では、字余り字足らずは句の調べを悪くすることになるので、歓迎されない。しかし、日常の中では往々にして殆どの人が気に欠けない事が多い。高齢者に多い喋り過ぎは字余り、若者の省略言葉は字足らずと言えるであろう。色々な世代の共存共栄により人間社会は成り立っているのである。世代が共通するものに「喜び」がある。誕生、入学、結婚などがそれに当たる。清々しい若葉の季節は、万人が喜びを共有できる。



# 京鹿子集

## 鈴鹿呂仁選

### 水琴集

至福たり雨後のさへづりひとしほに 和歌山 東浦 玉枝

かはたれの瀬音のひびき著我の花

あぢさゐや音沙汰といふ雨のさま

路・径・道・言葉探しの鹿の子草

里山は風の喝采濃あぢさゐ

くの一の鶴匠の愁ひ宇治の瀬々

言の葉の薬碎く世や桜桃忌

魚の飛ぶ江の島クルーズ沖薄暑

望むこと忘れ勝ちなる太宰の忌

九重の薔薇の正装舞踏へと

福岡 野口 宗久

豊中 吉田 孝江

芍薬や小棚に残る古薬  
届けらる紫陽花雨も抱いてやる  
末の子の内気わがままゆすらうめ  
ゆすらうめ食むに勇気の恋知らず  
消息は風の又聞き栗花落かな

海と伊豆別れ難きは五月旅 高槻 杉井真由美  
虎が雨一足先に泣きに来る

こひのぼり胎児の鼓動待ちわびる

蟻だけを見る少年の世界観

母の日や合せ鏡に居るわたし

どくだみや十字を切りて何を詫ぶ

漢泣きとは荒梅雨のやうなもの

溜息のやうに沙羅散る東林院

梅雨の川指揮者のみない合唱団

梅雨の蝶雨の余白に密と舞ふ

京都 宮本 幸子

福山 古本 もね

薔薇の字のほどけるやうに薔薇散りし

流れゆく景残像もまたみどり

蜘蛛の巣に雨の雫のネックレス

人生は岐路の連続みちをしへ

あぢさゐや私は万華鏡の中

紫陽花や毬艶やかに今朝の雨

梅雨蝶の翅を自在に開く朝

坪庭の影より淡き梅雨の闇

新樹道抜けて晴れやか河童橋

字余り字足らずも一瞬に若葉

きつね雨車前草の花発動す

蕨煮て歯触り良しと今朝の贅

褪せし蘭蜜を一滴遺言に

大津 村野名於子

姫路 松山 千里

蟻の列倦まず眺めて暇な人 東京 犬飼 典子  
七変化常識といふ逃げ口上  
手を取りて無沙汰を詫びる街薄暑  
くもの囲や近くて遠き子の心